

男性性のユートピア

——オットー・ヴァイニンガーにおけるナルシシズム的欲望をめぐって——

須藤 温子

(ヴァイニンガー) 博士、

ついに——女性問題が解決されたのを見るのは、私にとって救いです。ですから——私の尊敬と感謝の気持ちをお受け取りください！

アウグスト・ストリンドベリ¹

ストリンドベリの真実。世界秩序が女性性に脅かされている。ストリンドベリの誤り。世界秩序が女たちによって脅かされている。錯誤する者が真実を言うのは混乱の兆しである。

カール・クラウス²

われわれは概念によって世界を押さえ込む。

オットー・ヴァイニンガー³

はじめに

1903年。ウィーンで哲学的な性差体系の構築を高らかに宣言する書物が出版され、その著者が自殺を遂げる。オットー・ヴァイニンガー(1880-1903)の『性と性格』である。本論は、

¹ Karl Kraus, *Die Fackel*, Nr.351/352/353. 21. Juni, 1912, Wien 1912, S.3.

² Karl Kraus, *Die Fackel*, Nr. 144. 17. Oktober, 1903, Wien 1912, S.17.

³ Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung*, München 1980, S.3; オットー・ヴァイニンガー、竹内章訳『性と性格』、松村書店、1980年、13頁。本論文における『性と性格』からの引用は、1980年のマッテス&ザイツ初版復刻版に基づくものとし、以下GCと略記する。邦訳に関しては竹内章訳『性と性格』を参照し、引用箇所にはドイツ語版(D)、日本語版(J)のページ数を示した。なお、竹内訳『性と性格』は、ヴィルヘルム・ブラウミュラー二十三版を使用、その際キーペンホイヤー版(1932)を参照しているが、省略が多く注釈も一切削除されている。以上の理由から、『性と性格』からの引用はすべて筆者の訳出による。本論文の傍点による強調は作者、ゴチックによる強調はヴァイニンガーによるものとする。

『性と性格』にみられる性差体系の構築という彼のパフォーマンスと、それが内包している問題を明確に描き、問うものである。ヴァイニングァーは「二十世紀の諸思想の強力な媒体」⁴という役割を果たしているにもかかわらず、日本においては彼についてだけではなく、核心的著作ともいえるべき『性と性格』が全く紹介されていないに等しい。そこで、本論に入る前にまずは『性と性格』の出版および受容状況、そしてヴァイニングァーや彼の著作についての従来研究を紹介し、本論の問題の所在を明らかにすることにしよう。

1. 問題の所在

怪物的な哲学書『性と性格』は1926年には二十七版を重ね、普及版として流通し、さらに1932年にこの普及版がベルリンのキーペンホイヤー社からも出版された。ところが、アドルフ・ヒトラーの政権獲得後の1934年、『性と性格』は——反ユダヤ主義的な内容にもかかわらず、ヴァイニングァー自身がユダヤ人であったために——出版禁止リストにその名を連ねた⁵。戦後再びヴィルヘルム・ブラウミュラー社から普及版として二十八版(1947)が、1980年にはミュンヘンのマッテス&ザイツ社から初版が復刻刊行されている⁶。

ヴァイニングァーの『性と性格』受容期は、出版状況と批評態度の違いから、第二次世界大戦

⁴ Barbara Hyams / Nancy A. Horowitz, >>A critical introduction to the history of Weininger reception<<, in: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (Hrsg.), *Jews & Gender: responses to Otto Weininger*, Philadelphia 1995, S.3-20, hier S.6.

⁵ Vgl. Susan C. Anderson, >>Otto Weininger's Masculine Utopia<<, in: Gerald R. Kleinfeld (Hrsg.), *German Studies Review*, Volume XIX, Number 3, Arizona 1996, S.433-453, hier S.433; Stanzel, S.144, Anm. 6.

⁶ ヴィルヘルム・ブラウミュラー社から出版された『性と性格』は、第四版以降「無修正版」と記されてきた。だが、この「無修正版」という表記は現在まで誤解を招いてきた。というのも、第二版はすでにヴァイニングァー自らが初版を加筆修正した改訂版であり、以来、第二版の本文が無修正のまま版を重ねていたからである。ちなみに、第二版には『性と性格 第二版、改訂版(Zweite, mehrfach verbesserte Auflage)』、第三版には『性と性格 第二版無修正第三版(Dritte, mit der zweiten gleichlautende Auflage)』との表記がある。ただし第二版と第三版の間には、ヴァイニングァーの友人アルトゥール・ゲルバーの序文の削除、ヴァイニングァーのポートレート写真の追加といった変化がある。第四版以降の版は、第二版の本文をそのまま継承し、形式などは大枠として第三版を踏襲している。ヴィルヘルム・ブラウミュラー二十七版(1926)、二十八版(1947)とされる版は、ともに普及版(Volksausgabe)として出版された。普及版では注釈が削減されている。Vgl. Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Wien / Leipzig 1903; Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Zweite, mehrfach verbesserte Auflage, Wien / Leipzig 1903; Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Dritte, mit der zweiten gleichlautende Auflage, Wien / Leipzig 1903; Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Einundzwanzigste, unveränderte Auflage, Wien / Leipzig 1920; Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Volksausgabe, Wien / Leipzig 1926. なお、『性と性格』の出版史とそれに関する諸問題については Waltraud Hirsh, >>„26. unveränderte Auflage“. Bemerkungen zur Textgeschichte von Otto Weiningers *Geschlecht und Charakter*<<, in: Walter Methlagl (Hrsg.), *Mitteilungen aus dem*

を境に大きく二分割することができる⁷。具体的には、初版出版の二十世紀初頭から 1930 年代を中心とした受容第一期、1980 年代以降現在に至る受容第二期である。

受容第一期では、『性と性格』は哲学論文としては桁外れのベストセラーとして、ウィーンを中心にヨーロッパ各地に波及することとなる⁸。というのも、本書が——いかに本質主義的、性差別主義的内容であるにせよ——世紀末以来ウィーンにおいて社会政治的、文化的レベルで交わされてきた性愛、女性の本質、性差といった「性の問題(Geschlechterfrage)」について、心理・哲学的、倫理的視点からの「徹底的解明」⁹を意図し、あるひとつの断定的結論を提示したからに他ならない¹⁰。ジークムント・フロイト、カール・クラウスをはじめとする同時代の知識人たちや、二十世紀の文学や思想を代表する面々——ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、アウグスト・ストリンドベリ、ハイミト・フォン・ドーデラー、フランツ・カフカ、ヘルマン・ブロッホ、ジェームス・ジョイス、エリアス・カネッティ、ギュンター・グラスら——が、本書を受容してきたことが明らかになっている¹¹。

受容第二期は、1980 年のマッテス&ザイツ社から『性と性格』と遺稿集 „Über die letzten

Brenner-Archiv, Nr.13/1994, Innsbruck 1994, S.59-73.が詳しい。

⁷ Vgl. Dietrich Löffler, S.121.

⁸ Vgl. Gerald Stieg, >>Kafka and Weininger<<, in: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (Hrsg.), *Jews & Gender*, S.195-206, hier S.195; 1926 年の時点でデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、日本(1906 年、片山正雄訳、七版を重ねる)、植民地地域を含むイギリス(1906 年、脚注なし)、イタリア(1912)、アメリカでも出版され、ポーランド語、ロシア語、ハンガリー語(抄訳)に訳されている。Vgl. Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Volksausgabe, Wien / Leipzig 1926; Franz Karl Stanzel, >>Der weibliche Mann: Eine rückläufige Spurensuche von James Joyce zu Otto Weininger<<, in: Karlheinz Stierle (Hrsg.), *Poetika*, Bd. 29, München 1997, S.141-157, hier S.144; Dietrich Löffler, >>Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“<<, in: Karol Sauerland (Hrsg.), *Malancholie und Enthusiasmus: Studien zur Literatur- und Geistesgeschichte der Jahrhundertwende*, Frankfurt a. M. 1988, S.122-133, hier S.121; ヴァイニンガー、『性と性格』、394 頁参照。ヴァイニンガーは初版出版後にピストル自殺を遂げている。もちろん、『性と性格』がベストセラーとなった要因として、このスキャンダルを無視することはできない。だが、ヴァルトラウト・ハインドゥルが言うように、それだけでは『性と性格』の初版以来 1940 年代に至る知識人たちの受容、重版、数ヶ国語への翻訳などに対する十分な説明にはならないだろう。Vgl. Waltraud Heindl, >>Geschlecht oder Charakter. Otto Weiningers Kultfiguren<<, in: Klaus Amann / Hubert Lengauer (Hrsg.), *Österreich und der Große Krieg 1914-1918. Die andere Seite der Geschichte*, Wien 1989, S.81-87, hier S.81.

⁹ 「徹底的解明」あるいは「ある原理的研究」とは、『性と性格』の副題„Eine prinzipielle Untersuchung“である。

¹⁰ スラヴォイ・ジジエク、松浦俊輔・小野木明恵訳「オットー・ヴァイニンガーもしくは『女は存在しない』」『快樂の転移』、青土社、1996 年、223-224 頁参照。Vgl. Jean-Michel Palmier, >>Otto Weininger, Wien und die Moderne<<, in: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.), *Otto Weininger. Werk und Wirkung*, Wien 1984, S.80-95, hier S.95, Anm. 10.

¹¹ Vgl. Barbara Hyams / Nancy A. Harrowitz, S.5. 『性と性格』の受容史についてはこの文献が詳しい。

Dinge“ (1903) の初版が復刻刊行されたことを契機として始まる¹²。以来『性と性格』は、転換期ヴィーンにおけるセクシュアリティの議論をはじめとして、ナチズム前夜の(反)フェミニズム、反ユダヤ主義、反近代的思想を包括するヴィーン文化一般を再検証する際のテキストとしてアラン・ヤニク、ジャック・ル・リデール等やフェミニズム批評によって再び注目を集めてきた。また、先に挙げたような二十世紀の作家や思想家たちの『性と性格』受容研究が集中して行われるのも受容第二期である。その結果、ヴァイニンガーが『性と性格』で具体化した性差についての哲学的構想および考察は、ヨーロッパの文化および思想を背景として、クラウスに代表される同時代の思想家、さらにはカネッティやグラスに至る次世代の知識人たちをも網の目のように紡ぎあわせる「二十世紀の諸思想の強力な触媒」として再評価され、現在では決して看過することができないものとなっている¹³。

ところが、ヴァイニンガーが『性と性格』の初版序文において性差体系の構築を宣言しているにもかかわらず、このパフォーマンスについては看過されてきたのである。

初版序文にはこうある。

本書は、男性と女性の関係に新たな解釈を与えるために企図されたものである。男女のそれぞれの特徴を可能な限り列挙したり、従来なされてきた学術的な測定と実験の結果を並べていくのではなく、ある単一原理から男女間の一切の相違を導き出そうとするものである。この種の従来の研究書と本書との違いはまさにこの点にある。本書は瑣事に拘泥せず、ひとつの最終目標へと突き進む。すなわち、観察に観察をつみ重ねるのではなく、男女の精神的な差異を体系化する。したがって女性一人一人を扱うのではなく、女性一般、女性そのものを対象とする。¹⁴

『性と性格』は、第一部「性の多様性」と第二部「性の典型」からなり、第二部を本論として「男性と女性の関係に新たな解釈を与え」、「ある単一原理」に則って男女の精神的な差

¹² ちなみに既に 1970 年後半から各地に『性と性格』再出版の波が到来した。1975 年フランス初出版、同年イギリス再出版、1977 年ノルウェー再出版、1980 年ドイツ初版復刻刊行、同年日本再出版。

¹³ Vgl. Waltraud Heindl, S. 83; Barbara Hyams / Nancy A. Horowitz, S.6.

¹⁴ GC, DIII=J1. „Dieses Buch unternimmt es, das Verhältnis der Geschlechter in ein neues Licht zu rücken. Es sollen nicht möglichst viele einzelne Charakterzüge aneinandergereiht, nicht die Ergebnisse der bisherigen wissenschaftlichen Messungen und Experimente zusammengestellt, sondern die Ableitung alles Gegensatzes von Mann und Weib aus einem einzigen Prinzip versucht werden. Hierdurch unterscheidet es sich von allen anderen Büchern dieser Art. Es verweilt nicht bei diesem oder jenem Idyll, sondern dringt bis zu einem letzten Ziele vor; es häuft nicht Beobachtung auf Beobachtung, sondern bringt die geistigen Differenzen der Geschlechter in ein System; es gilt nicht den Frauen, sondern der Frau.“

異の体系化という最終目標が目指される。

確かに、文化研究、ジェンダー分析、フェミニズム文芸批評などの視座から、『性と性格』における男性と女性の定義や性的属性が注目され、その問題点が指摘されてきた¹⁵。しかしながら、男性と女性に対する定義づけ、あるいは価値づけという作業自体が、そもそもどのような性差体系を構築可能にし、その体系がどのような問題を持つのか、ということについては検討されてこなかった。そこで、本論は『性と性格』における性差体系の構築をめぐるパフォーマンスに着目し、以上の点を問うことにする。次章では、まず性差体系がどのように構築されているのかを、男性と女性の定義、および男性と女性の間係を検討しながらみていくことにする。

2. 『性と性格』における性差の体系化とその分析

2-1. 性の定義

2-1-1. 両性性

『性と性格』の第一部「性の多様性」は、男性と女性という概念自体を問うことから始まる。

はたしてすべての人間が厳然と「女性」と「男性」とに二分されるのだろうか？ 女性同士と、男性同士は、あらゆる側面において完全に一致するものだろうか？ このことは、性差に関する従来の議論では大抵の場合、もちろんのこと無自覚に自明のものとしてされてきた。しかし、自然界にはこのようにぱっくりと口を開けた不連続性などどこにもないのである。(……) 慎重な解剖学者ならば、脳であれ身体の一部であれ、そもそも性差の例外なき判断基準となるものがあるかどうかたずねられればこう答えるだろう。一貫した男性と女性の性差は証明不可能である、と。(……) 性差を決定する判断基準

¹⁵文化研究の視座からこの問題を扱ったものとして Palmier, >>Otto Weininger, Wien und die Moderne<<; Nike Wagner, >>Geschlecht und Charakter<<, in: Paulus Manker (Hrsg.), Weiningers Nacht, 2. überarbeitete Auflage, Wien 1988, S.97-106; ジェンダー分析およびフェミニズム文芸批評の視座からは Ingvild Birkhan, >>Das Wien der Jahrhundertwende – Eine Wende für oder gegen die Frau?<<, in: Herta Nagl-Docekal / Herlinde Pauer-Studer (Hrsg.), Denken der Geschlechterdifferenz. Neue Fragen und Perspektiven der feministischen Philosophie, Reihe Frauenforschung Bd. 14, Wien 1990, S.41-70; Johannes G. Pankau, >>Körper und Geist. Das Geschlechterverhältnis in Elias Canettis Roman Die Blendung<<, in: Colloquia-Germanica: Internationale Zeitschrift für Germanistik, 23:2, Tübingen 1990, S. S.146-170; Anderson, >>Otto Weininger's Masculine Utopia<<; スラヴォイ・ジジエク「オットー・ヴァイニンガーもしくは『女は存在しない』」がある。

など存在しないのだろうか？ 男性と女性を区別することは、もはや不可能になってしまったのだろうか?!¹⁶

第一部の表題「性の多様性」が示唆するように、ヴァイニンガーは男性と女性に厳然と二極分化される性差について疑問を投げかけている。そこで性の多様性は、「両性性 (Bisexualität)」という、当時一般的に浸透していた概念を前提として、次のように検討されていく¹⁷。

人間には、疑問の余地なく次のことが適用される。男性と女性の間には**無数の段階**が、すなわち「性の中間形態」がある。(……)性の典型から、現実には存在しない理想的男性を M、また理想的女性を W とすることが可能である。これらの典型は構築可能なだけでなく、構築されなければならない。(……)完全な男性と完全な女性の間にある無数の中間段階は、自らは到達不可能な、完全な男性と女性の近似体でしかない。(…

¹⁶ GC, D5f=J15. „Sollten wirklich alle >>Weiber<< und alle >>Männer<< streng voreinander geschieden sein und doch auf jeder Seite alle untereinander, Weiber einerseits, Männer andererseits sich in einer Reihe von Punkten vollständig gleichen? Wie ja bei allen Verhandlungen über Geschlechtsunterschiede, meist natürlich unbewusst, vorausgesetzt wird. Nirgends in der Natur ist sonst eine so klaffende Unstetigkeit; [...] Aber die besonnenen Anatomen geben, um ausnahmslose Kriterien gefragt, in jedem Falle, handle es sich nun um das Gehirn oder sonst um irgend ein Organ des Körpers, zur Antwort: durchgehende sexuelle Unterschiede zwischen allen Männern einerseits und allen Frauen andererseits sind nicht nachweisbar. [...] Also ist es nichts mit den Geschlechtsunterschieden? Da wäre es ja fast geraten, Männer und Weiber überhaupt nicht mehr zu unterscheiden?!“

¹⁷『性と性格』を評価していたクラウスは、1907年に雑誌『炬火』で「人間の性の二分化は、いまだなお科学的に認められていない」と述べている。Karl Kraus, *Die Fackel*, Nr.229. 02. Juli, 1907, Wien 1907 S.13.「両性性」については以下の論文を参照のこと。Vgl. Jacques Le Rider, >>Modernismus / Feminismus – Modernität / Virilität. Otto Weininger und die asketische Moderne<<, in: Alfred Pfabigan (Hrsg.), *Ornament und Askese. Im Zeitgeist des Wien der Jahrhundertwende*, Wien 1985, S.242-260, hier S.253; Stanzel, S.141ff; 「両性性」は、フロイトの友人ヴィルヘルム・フライスが主張した概念である。この概念は、特にフライス、フロイト、ヴァイニンガーにとって重要であり、ヴァイニンガーの死後この概念の著作権をめぐる論争が噴出する。これについては以下の文献を参照のこと。Vgl. Hannelore Rodlauer, >>Fragmente aus Weiningers Bildungsgeschichte<<, in: Hannelore Rodlauer (Hrsg.), *Otto Weininger. Eros und Psyche. Studien und Briefe 1899-1902*, Wien 1990, S.11-51, hier S.33ff; Sigmund Freud, *Briefe 1873-1939*, Ernst L. Freud (Hrsg.), Frankfurt a. M. 1960, S.248f; Wilhelm Fliess, *In eigener Sache*, Berlin 1906. なお、フロイトはヴァイニンガーに対し、女性嫌悪と反ユダヤ主義に深く結びつく去勢コンプレックスに支配された神経症という診断を下している。このフロイトの評価については、Sigmund Freud, *Studienausgabe Band VIII: Zwei Kinderneurosen*, Alexander Mitscherlich / Angela Richards / James Strachey (Hrsg.), Frankfurt a. M. 1969, S.36, Anm.2を参照のこと。また、フロイトの精神分析とヴァイニンガーの『性と性格』におけるジェンダーを分析したものとしては Birkhan の論文を参照のこと。

…) 現実には男性も女性も存在しない、といえるだろう。存在するのは、女性性と男性性だけである。¹⁸

ここでは、一個人が両性性から、つまり男性性および女性性の混合から成り立っているという議論が展開されている。したがって、男性性によってのみ成り立つ「完全な男性」M と、女性性によってのみ成り立つ「完全な女性」W は、現実には存在せず、あくまで二極を示す指標でしかない。ところが、第二部「性の典型」の冒頭部分では「性の中間形態」という第一部での主張が正面から覆されてしまう。

しかしながら、人間については心理学的に、**男性か女性のいずれか**であることは避けられない事実である。(……) 男性と女性の関係は、決定的な場面においては根本的なもの、超越不可能なものであることがここに判明する。いかなる性の中間段階があろうと、人間は結局のところ**どちらかのうちのひとつ、つまり男性か女性でしかない**。この最も古い経験的二項対立には、(……) 決して無視できない深遠なる真実が宿っている。

19

第二部「性の典型」では、「真実」の名のもとに性の二極分化が断言され、読者を困惑させる。このように、第一部「性の多様性」と第二部「性の典型」では、ヴァイニンガーの決定的な態度変容が認められるのだ。彼の相矛盾する主張が、第一部と第二部の連続性を断ち切り、議論の基盤を崩してしまっている²⁰。

ヴァイニンガーは両性性から成り立つ人間、という発想から出発したはずである。しかし、この両性性の議論は、男性か女性のうちのいずれか、という性の二極分化の議論へとすりかえ

¹⁸ GC, D9f=J18ff. „Vom Menschen aber gilt ohne jeden Zweifel folgendes: Es gibt unzählige Abstufungen zwischen Mann und Weib, >>sexuelle Zwischenformen<<. [...] : so können wir einen idealen Mann M und ein ideales Weib W, die es in der Wirklichkeit nicht gibt, aufstellen aus sexuelle Typen. Diese Typen können nicht nur, sie müssen konstruiert werden. [...] Und ebenso gibt es nur alle möglichen vermittelnden Stufen zwischen dem vollkommenen Manne und dem vollkommenen Weibe, Annäherungen an beide, die selbst nie von der Anschauung erreicht werden. [...] Es gibt in der Erfahrung nicht Mann noch Weib könnte man sagen, sondern nur männlich und weiblich.“

¹⁹ GC, D97f=J93f. „Vom Menschen jedoch lässt sich psychologisch mit vollster Bestimmtheit behaupten, dass er, zunächst wenigstens in einer und derselben Zeit, notwendig entweder Mann oder Weib sein muss. [...] Das Verhältnis Mann-Weib erweist sich hier als fundamental an der entscheidenden Stelle, als etwas, worüber nicht hinauszukommen ist. Trotz allen sexuellen Zwischenformen ist der Mensch am Ende doch eines von beiden, entweder Mann oder Weib. Auch dieser ältesten empirischen Dualität steckt [...] eine tiefe Wahrheit, die sich nicht ungestraft vernachlässigen lässt.“

²⁰ Vgl. Löffler, S.123.

られ、現実の男性(Mann)と女性(Weib)は、実際には存在しないはずの、男性性のみを備えた典型 M と女性性のみを備えた典型 W と同一視されていく²¹。このようにして、『性と性格』では男性は男性性を、女性は女性性を備えた人間としてラディカルに規定されていくのである。ル・リデールは、この状況を次のように指摘する。「『性と性格』は、一般化した両性性の確認と、性別の回復（再生産）の企ての間にある根本的な揺らぎを要約したものである」²²。

ル・リデールがいみじくも言っているように、第二部「性の典型」ではまさに「性別の回復（再生産）の企て」が一貫して行われる。第一部での性差への問いと両性性という出発点は、性の多様性を認識するためにあるわけではない。そうではなく、むしろこれらの出発点は、生物学的に男性と女性を区別することは不可能だが、心理・哲学的、倫理的には「性差の例外なき判断基準」を提示し、男女の性差を証明することが可能なのだ、という、ヴァイニンガーの目的論的企てを再確認させるためにある。

では次に、『性と性格』において男性性と女性性にはどのような具体的特徴が与えられ、それらの特徴を持つ男性と女性はどうのように定義されるのか、そして男性と女性はどうのように関係づけられているのかを確認することにしよう。

2-1-2. 男性と女性の定義

まず男性性の特徴とは、観念や概念を有し、魂、自我(Ich)、個性、「感覚を越えた人格」²³、自由、性格、意志を持つことである。このような男性的特徴から、男性とは、個人、主体、単子として自律する存在、形而上学的存在として価値づけされ、「高次の精神的、永遠的生」²⁴を、つまり精神的、絶対的、普遍的な価値や理念や存在の所有を意志するものとされる。これらの男性性——明晰な自意識、論理的思考、知識に対する完璧な記憶力などの具体的な属性——を理想的に、かつ十全に体現する男性が天才である。

しかしながら、男性は非性的とみなされる精神的、高次の生を生きると同時に、性的とみなされる肉体的、低次の生を生きるというジレンマに常に引き裂かれている。本来の男性的な高次の生を全うするためには、それを不可能にしている自己の肉体的生からの脱却を余儀なくされるからだ。ただし、男性にとって肉体的、低次の生に属する性愛は、「単なる付属物」²⁵と

²¹ Vgl. Birkhan, S.45; Stanzel, S.144f; Barbara Hyams / Nancy A. Harrowitz, S.3; ジョージ・L・モッセ、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ』、柏書房、1996年、181-182頁参照。

²² Le Rider, S.253.

²³ GC, D239=J200.

²⁴ GC, D380=J314.

²⁵ GC, D115=J103.

され、脱肉体的生を目指す運動によって「自己の性愛を否定も肯定もできる」という²⁶。

一方女性性の特徴は、これらの男性性との関連において特徴づけられている。女性性の特徴とは、一言でいえば男性性の特徴の欠如、すなわち「魂、自我、個性、人格、自由、性格、意志の欠如」²⁷である。したがって、女性性は男性性に対する劣性とされ、女性は断片的な自己についての記憶および過去の欠落などの劣等属性を付与された、いわば一貫性に欠ける非連続な²⁸、無所有の存在として価値付けされる。また、自我が欠けている女性は形而上学的存在という側面をもたない。したがって、感覚的、本能的、衝動的、無意識に生きる肉体的な低次の生しか生きず、「女性は性欲以外の何ものでもなく、性欲そのものでしかない」²⁹。そこで女性は、子供と種族維持への欲求とされる「母性」と性交自体への欲求とされる「娼婦性」という二極化された性格を持つことになり、結果としてこの二つの性格を体現する、母と娼婦に大別される。

2-1-3. 定義についてのまとめ

『性と性格』において、女性（性）は、唯一価値あるものとして規定された項である男性（性）に対する欠如として記されている。ここでみられるのは、価値あるものとみなされる優越属性を男性性に、無価値とみなされる劣等属性を女性性に結びつけ、これらの二項対立関係を優位性判断のための基準として定立する、というしぐさである。女性は、価値ある形而上学的存在から、精神的な（男）性から排除されるべきもの、すなわち無価値とみなされる身体性や性欲といった否定的属性を引き受けること——記されること——によって、男性の優越性と十全性を保証し維持していく、従属的かつ必要不可欠な対立項として統制されている。『性と性格』の性差の記述において機能しているのは、男性／女性といった極性関係において、単一項のみに価値を付与し正当化する、抑圧的なヒエラルキー化のメカニズムに他ならない。

ヴァイニングァーは、男性という本質的存在の優越性を正当化するために、あるいは男性・主体の形而上学を構築、維持するために、以上でみてきたような「観念論的かつ新カント派的な種々の価値の再構築を目指す」³⁰。そのため、男女の不平等的差異は、特に存在論的な対立、つまり形而上学的な存在と形而上学的な非存在の間で展開されることになる。また、女性と男

²⁶ Vgl. GC, D115f=J103f; Hyams and Harrowitz, S.3; Birkhan, S.45.これについては第三章でより詳しく論ずる。

²⁷ Vgl. GC, D269=J223. „So ist denn ein ganz umfassender Nachweis geführt, dass W seelenlos ist, dass es kein Ich und keine Individualität, keine Persönlichkeit und keine Freiheit, keinen Charakter und keinen Willen hat.“

²⁸ Vgl. GC, D187ff=J160f.

²⁹ Vgl. GC, D116=J103f.

³⁰ クリスティーネ・ブッチ＝グルックスマン、山田直・田代葆訳「危機の文化と女性性の神話」『ファシズムと女性たち』（リタ・タルマン編）、三嶺書房、1990年、19頁。

性を定義するという試みは、非歴史的な本質主義を基盤としており、自明とされる社会的な人間の行動やふるまいに対する心理学的、社会学的諸根拠が欠落しているのは言うまでもない³¹。

『性と性格』の初版序文における「性差体系の構築」の宣言とともに開始されたパフォーマンスとは、いったいどのようなパフォーマンスだったのか。それは、女性性を男性性の諸概念に従属するものとして、女性を男性の他者として確定し記述するという企てである。そしてこの目論見は、男性を「解釈を与える」主体として、女性を男性による解釈によって把握される対象として配置する性差体系を構築することではじめて可能になるのだ。したがって、目的論的に目指された「性差体系の構築」によって機能するのは、当然ながら男性 - 主体 / 女性 - 対象という支配 / 非支配項に固定された非対称の関係において立ち上がる、エコノミックなシステムなのである。

身体性や性欲を劣等的価値とみなし、それらを劣等的属性として女性性に付与、固定するという抑圧的なしぐさによって、それらの対立項としての精神性、理性、自我には優越的価値付けがなされ、男性性の属性として固定される。この時、ヴァイニンガーの構築した「男性」は、あたかも肉体的な生や性欲とは無関係にある、精神的、非肉体的、理念的な高次の生を志向する存在としてのみ存立する——欺瞞に満ちた、極めて危うい——可能性を獲得するのである。ただし、この可能性は、男性性が女性性へと排除した劣等的価値の男性性への侵入を防ぐ「保証」を得ることで、さらには、男性が「単なる付属物でしかない」自己の性愛や自己の生の一部である低次の生を否定することでようやく生じる可能性なのだ。

ところで、特定の性に価値が付与、固定されることは、どのようにして保証されるのか。この問いに答えるために、『性と性格』にみられる哲学的根拠を確認することにしよう。

以上でみてきたように、形而上学的存在とは、何よりもまず自我を有する存在であった。当然男性はそれに該当する。他方、自我という男性性の欠如として記される女性は、もちろん自我を持たず³²、形而上学的存在でも精神的な高次の生を目指す存在でもない。男性は、自我を持ち、女性は自我を持たない。したがって、男性は形而上学的存在であり、女性は形而上学的「非存在(Nicht-Sein)」³³である。これが『性と性格』において構築された性差構造を支える哲学的根拠である。さらに、男性と女性の関係は次のように主体と客体の関係としても位置づけられている。

³¹ Vgl. Pankau, S.151; Wagner, S.104f.ヴァイニンガーの反フェミニズム的態度は当時目新しいものではなかったが、彼の反フェミニズムは、心理学的偏見を宇宙的規模の原理にまで高めた点で独自のである。これについては Palmier, S.32.を参照のこと。

³² ヴァイニンガーは、自我を持たず無意識的に生きる状態をヘニーデ(Henide)と定義し、このヘニーデを女性の特性とみなした。ヘニーデについては GC, D125-130=J110-115, D243=J203f.を参照のこと。

³³ Vgl. GC, D399=J330.

男性と女性の意味は、単独で探求されるべきではない。なぜなら、それらは相互の関連においてのみ認識され、規定されうるものだからである。(……)男性と女性の関係は**主体と客体**の関係に他ならない。**女性は客体として自己の完全を目指す**。(……)女性は主体として扱われることを拒み、いずれにせよ常に受身でのみありつづけようとする——これがまさに女性であることなのだが——(……)。女性の要求は、単に肉体を求められたり他者の所有物となることにとどまらない。単なる感覚が概念として捉えられられることではじめて実体を獲得するように、つまりは**対象**となるように、女性は、主体としての男性や子供からその**客体**とされ実在を与えられることで、はじめて存在と存在感を得るのである。³⁴

『性と性格』の論理で一貫しているのは、女性を男性との関連において規定することだ。シヨシャナ・フェルマンの言葉を借りるなら、『性と性格』で描かれる男性は男性/女性という対立図式の「一般等価物 (the universal equivalent)」である、といえるだろう。つまり、男性は主体として男性の対象である女性の価値を計り、意味づけを行い、認識するものなのである。

もういちど繰り返すならば、『性と性格』の性差構造を支える根本原理は、男性は自我を持ち、女性は自我を持たない、という二項対立であった。女性は自我をもたないゆえに主体として存立しない。女性が自己として存立する場合は、主体たる男性から認識されることによって客体として存在論的な意味を与えられたときに限定される。このようにして、女性が主体となる契機をあらかじめ剥奪されることが正当化され、男性と女性の関係では男性は常に主体として、女性は常に男性の対象として固定されるのだ。まさに、この根本原理こそが、極性関係における価値や属性の固定を保証するのである。したがって、男性の対象である女性は、**男性 - 主体が女性 - 対象に代わって対象の意味づけを行う、表象代理**という抑圧的なしぐさの反復によって、男性 - 主体にとって把握可能な、あるいは価値づけ可能な対象へと常に還元されうるものとして位置づけられるのである³⁵。

³⁴ GC, D392f=J324. „Isoliert ist der Sinn von Mann und Weib nicht zu erforschen, sie können in ihrer Bedeutung nur aneinander erkannt und gegeneinander bestimmt werden. [...] Es ist das Verhältnis von Mann und Weib kein anders als das von Subjekt und Objekt. Das Weib sucht seine Vollendung als Objekt. [...] Die Frau will nicht als Subjekt behandelt werden, sie will stets und in alle Wege – das ist eben ihr Frau-Sein – lediglich passiv bleiben, [...]. Ihr Bedürfnis ist vielmehr, nur als Körper begehrt, und nur als fremdes Eigentum besessen zu werden. Wie die bloße Empfindung erst Realität gewinnt, indem sie begrifflich, d.h. Gegenstand wird, so gelangt das Weib zu seinem Dasein und zu einem Gefühle desselben erst, indem es vom Manne oder vom Kinde, als dem Subjekte, zu dessen Objekt erhoben wird, und so eine Existenz geschenkt erhält.“

³⁵ Vgl. Shoshana Felman, >>Les Femmes et la Folie : Historie Littéraire et Idéologie<<.

認識の二元論的な対立機構、すなわち認識する主体と認識される客体の関係は、極性関係において分割、固定され、男性 - 主体を一方的に作りあげるナルシスティックなエコノミー機構として機能する。次節で男女の関係をより詳しく分析する前に、男性と女性の認識と存在をめぐって繰り広げられる峻烈な二項対立の最終到達地点を確認しておこう。それは『性と性格』の結論でもある。

このようにして、男性と女性の二項対立は、高次の生と低次の生の、主体と客体の、形式と質料の、そして存在と非存在の二元論へと次第に発展していくのである。あらゆる形而上学的、先験的存在は、論理的、道徳的存在である。したがって、女性は非論理的、非道徳的存在なのである。(……) 完全な男性は、神の似姿であり、絶対的**存在**である。一方女性あるいは男性の中の女性は、**無**の象徴である。

第二部の冒頭で提起した主要な問い、すなわち男性であるとはどういうことなのか、また、女性であるとはどういうことなのか、という問いに答えることにしよう。女性であるとは存在しないということ、実体をもたないことである。女性は**存在しない**、すなわち**無**である。人はある何々という**存在**であるのか、それとも何の**存在**でもないのかによって**男性か女性か決まるのだ**。³⁷

男性と女性の関係は、高次の生と低次の生の、主体と客体の、存在と非存在の二項対立関係に結び付けられ、権力的な位階関係として想定されている。そこでは、男性は究極的に「神の

in: *La Folie et la chose littéraire*, Paris 1978, S.138-155, hier S.140f. (シヨシャナ・フェルマン、土田知則訳「女性と狂気—文学史とイデオロギー」『狂気と文学的事象』、水声社、1993年、223 - 224頁。) Shoshana Felman, >>Women and Madness: The Critical Phallacy (Balzac, „Adieu“)<<, in: *What does a woman want? Reading and Sexual Difference*, The Johns Hopkins University Press 1993, S.20-40, hier S.24. (シヨシャナ・フェルマン、下河辺美知子訳「女性と狂気 批評的/致命的誤謬 (クリティカル/クリティカル・ファラシー) (バルザック「アデュー」)」『女が読むとき女が書くとき 自伝的新フェミニズム批評』、勁草書房、1998年、38-40頁。)

³⁶ GC, D398=J329. „So hat sich allmählich die Dualität von Mann und Weib zum Dualismus überhaupt entwickelt, zum Dualismus des höheren und des niederen Lebens, des Subjekts und Objekts, der Form und der Materie, des Etwas und des Nichts. Alles metaphysische, alles transcendente Sein ist logisches und moralisches Sein: das Weib ist alogisch und amoralisch. [...] Der reine Mann ist das Ebenbild Gottes, des absoluten Etwas, das Weib, auch das Weib im Manne, ist das Symbol des Nichts:“

³⁷ GC, D383=J318. „Die Frage also, welche im Eingang dieses zweiten Teils als sein Hauptproblem formuliert wurde, die Frage nach der Bedeutung des Mann-Seins und Weib-Seins, kann jetzt beantwortet werden. Die Frauen haben keine Existenz und keine Essenz, die sind nicht, sie sind nichts. Man ist Mann oder man ist Weib, je nachdem ob man wer ist oder nicht.“

似姿」、「絶対的存在」であり、女性は非存在、「無」なのだ。

さて、男性と女性の関係は、『性と性格』の第二部第十一章「愛と美(Erotik und Ästhetik)」で愛と性愛というテーマで具体的に論じられている。先取りしていえば、それは愛と性愛における男性 - 主体による女性の二重の客体化についての議論である。そこで、本節で明らかになった男性と女性の定義、そして男性と女性の基本的な関係をもとにして、次節では「愛と美」を中心に分析しながら、男性と女性の関係をさらに明瞭に描き出していくことにしよう。

2 - 2. 男性と女性の関係——愛と性愛

2 - 2 - 1. 愛

『性と性格』の第二部第十一章「愛と美」では、愛と性愛とは相反するものとして、明確に分けて論じられている³⁸。愛は具体的に、「＜プラトニックな＞愛」³⁹、「純粹で高尚な、性欲と無関係な愛」⁴⁰とされ、性愛は、肉体に関する欲望、肉体的性交渉を意味する。ここでは「愛と美」において、とりわけ愛がどのように捉えられているかを問いながら、男性と女性の関係を描き出していくことにしよう。

男性が女性を愛する場合、具体的な相手の人格は愛されているのだろうか。それとも、彼女は比類なき遠大な運動の出発点としてしか役立たないのではないだろうか。一切の愛において男性は自分自身しか愛さない。(……)その自分自身というのは(……)こうありたい、こうあるべきだと思う完全なる自己、最も深くにある知的本性、逃れられない束縛や世俗的なしがらみから解放された自分なのだ。それ以外の何ものでもない、完全なる自己であることのほかに、彼がこれほど切迫して要求し、焦がれ熱望するものなどない。ところが、彼は志向する純粹な自己、すなわち到達目標である完全なる自己を、自己の存在の深みでは白日の光の下で見ることができず、確信がもてない。そのため、より簡単にそうあるべく、彼はそれを外部で思考しなければならない。そこで彼は、絶対的な価値のある存在という理想を別の人間に投影する。これこそが男性が女性を愛する意味に他ならない。(……)こうして愛は憎悪と同様に投影現象であって、友情のような等価現象ではない。(……)愛の前提は二人の個人の不均等、不平等価値にある。

³⁸ ヴァイニンガーは Erotik と Liebe を同一視して「(精神的)愛」とし、Sexualität と Geschlechtstrieb を同一視して「性愛」としている。Vgl. GC, D315=J262.

³⁹ GC, D318=J264.

⁴⁰ GC, D318=J264.

以上の説明から、「性欲とは無関係な」「＜プラトニックな＞愛」とは、「完全な自己」を熱望する、まさに「自分自身しか愛さない」男性のナルシズム的な投影現象だ、ということが判明する。『性と性格』における男性の女性に対する愛を「完全にナルシズム的な現象」と看破したスラヴォイ・ジジエクも、「自分が追い求める理想が、すでに他の人間、つまり愛する対象の中で実現されているという幻想の上に、愛は成り立っている」⁴²、と指摘する。

ところで、ヴァイニンガーは男性の女性に対する愛しか描かない。「愛と美」では、「愛するという高尚な能力は、性を超越した男性のみに与えられたものなのか、それとも女性にも与えられているのか」⁴³、と問われている。この問いの答えは次のとおりである。「愛は、主観性に束縛された主体が持つ願望に由来するから、常に外部に向かい、超越的である。(……)女性は、真に愛する能力を持たない」⁴⁴。前節で明らかになったように、肉体的な低次の生のみを生き、自我をもたない形而上学的非存在であるゆえに、主体として存立しない女性は、したがって「主体が持つ願望に由来する」愛する能力を持たない、ということになる。

このように、男性との関係において、女性は一方で愛するという行為の主体となることから予め排除され、他方で男性自己の理想的本質が投影される対象の役割を担うことになる⁴⁵。このとき女性は、男性 - 主体が自分自身と鏡像関係を結ぶための媒介物、つまりナルシスティックな男性自己像を映し出し、反復的な認識を可能にする鏡となるのだ。

男性のナルシズム的な投影現象である愛における男女の関係は、以上で明らかになった。

⁴¹ GC, D322ff=J269f. „Ist es also zu glauben, dass diese konkrete Person geliebt werde in der Liebe, oder dient sie nicht vielmehr einer unvergleichlich größeren Bewegung nur als Ausgangspunkt? In aller Liebe liebt der Mann nur sich selbst. [...] das, was er ganz sein will und ganz sein soll, sein eigenstes, tiefstes, intelligibles Wesen, frei von allen Fetzen der Notwendigkeit, von allen Klumpen der Erdenheit. [...] Und doch bedarf er nichts so dringend, ersehnt er nichts so heiß als ganz und gar er selbst und nicht anders zu sein. Das eine aber, wonach er strebt, das Ziel, erblicket er nicht in hellem Glanze und unverrückter Festigkeit auf dem Grunde des eigenen Wesens, und darum muss er es draußen denken, um so ihm leichter nacheifern zu können. Er projiziert sein Ideal eines absolut wertvollen Wesens auf ein anderes menschliches Wesen, und das und nichts anders bedeutet es, wenn er dieses Wesen liebt. [...] So ist die Liebe ein Projektionsphänomen gleich dem Hass, kein Äquationsphänomen gleich der Freundschaft. [...] Liebe ist stets ein Setzen der Ungleichheit, der Ungleichwertigkeit.“

⁴² ジジエク、228頁。なお、ドイツ哲学の系譜をたどりながらヴァイニンガーの主体理論におけるナルシズムを論じたものとしては次の著作がある。Daniel Eckelt, >>Der Narzissmus des metaphysischen Subjekts: Marginalien zu Otto Weiningers Subjekttheorie<<, in: *Otto Weininger*, S.158-166.

⁴³ GC, D336=J281.

⁴⁴ GC, D337=J283. „Liebe ist stets hinauswollend, transcendent, weil sie der Ungenügsamkeit des an die Subjektivität gefesselten Subjektes entstammt. [...], es [das Weib] ist ihrer [wahrer Liebe] unfähig.“

では、性愛において男女の関係は、どのように描かれるのか。

2-2-2. 愛と性愛

「性欲は女性を肉体的に否定する。愛は女性を心理的に否定する。卑俗な性愛は、女性をオナニーの、あるいは子供を生む道具としかみない」⁴⁶。「低次の性愛のみならず、高次の愛もまた、女性を目的それ自体としてではなく、愛する主体という（男性）自我の純粋な表現のための単なる手段として利用する」⁴⁷。

性愛における男女の関係は、愛における男女の関係と類似するものとして提示されている。性愛においてもまた、女性は男性との関係において男性の道具、手段として規定されている。次の引用では、本来対極関係にある愛と性愛が、男性と女性の間において同一の目的を共有していることが明らかになる。

肉体的な性愛が、自己の肉体的形態を持続的に創出しようとする有機体の試みであるとするれば、愛もまた基本的に精神的形態、すなわち個性を究極的に実現しようとする試みなのだ。ここに（性愛と愛の共通点とでもよびうる）自己永遠化の意志を子供の創造と結びつける契機がある。性欲も愛もともに自己実現化の試みなのだ。前者が身体的模倣による個人の永遠化の試みならば、後者は精神的似姿による個性の永遠化の試みである。⁴⁸

男性の自己実現の試みに、愛と性愛は共通の目的を見出す。両者において明瞭に描き出されるのは、男性と女性との関係において企てられる、男性の自己投影と自己実現、すなわち男性的ナルシズムにほかならない。

ナルシズムは、フロイトの理論をもとに、フェミニズム文芸批評でしばしば用いられる精

⁴⁵ Vgl. Birkhan, S.51.

⁴⁶ GC, D332=J277. „Der Geschlechtstrieb negiert auch das körperliche, die Erotik das psychische Weib. Die ganz gemeine Sexualität sieht im Weibe einen Apparat zum Onanieren oder eine Kindergebärerin;“

⁴⁷ GC, D331=J277. „Aber auch die höchste Erotik, nicht nur die niederste Sexualität, benutzt das Weib nicht als Zweck an sich selbst, sondern stets nur als Mittel zum Zweck, um das Ich der Liebenden rein darzustellen.“

⁴⁸ GC, D331=J276. „Wie die leibliche Sexualität der Versuch eines organischen Wesens ist, die eigene Form dauernd zu begründen, so ist auch jede Liebe im Grund nur das Streben, seelische Form, Individualität, endgültig zu realisieren. Hier liegt die Brücke, welche allen Willen zur eigenen Verewigung (wie man das Gemeinsame der Sexualität und der Erotik nennen könnte) mit dem Kinde verbindet. Geschlechtertrieb und Liebe sind beide Versuche zur Realisierung seiner selbst, der erste sucht das Individuum durch ein körperliches Abbild, die zweite Individualität durch ihr geistiges Ebenbild zu verewigen.“

神分析用語である⁴⁹。ところが奇妙なことに、ナルシズム分析の際にその語源であるナルシス、ひいてはオウィディウスの『ナルシスとエコー』が注目されることはまずない⁵⁰。ヴァイニングアの思考体系に顕著に現れるナルシズムとそれが引き起こす問題を明示するために、ここで一旦『ナルシスとエコー』に立ち戻ろうと思う。なぜならば、『性と性格』では女性を解明するという名目のもと、実際には男性の優越性を不動のものとして描くという企てが女性という男性に類似する対立項を必要とするように、男性ナルシスの「狂気」⁵¹を描く『ナルシスとエコー』にも、まさに女性エコーが決定的にかかわってくるからである。そこで、まずは『ナルシスとエコー』のあらすじを考察し、次に両テキストにあらわれるナルシズムを検討することにしよう。

2-2-3. 『ナルシスとエコー』

水のニンフ、リリオペはナルシスを産み、予言者ティレジアスから「この子が自己を知れば短命に終わる」⁵²と告げられる。やがてナルシスは誰をも魅了する美しい少年に成長するが、誰も彼を魅惑することはできない。エコーはナルシスの鹿を追う姿を一目見て恋焦がれ、彼を追っていく。エコーは「決して応答に責任を負うことがなく、決して会話を始めることができ

⁴⁹ ジグムント・フロイトの理論によると、ナルシズムには第一次ナルシズムと第二次ナルシズムがある。第二次ナルシズムは第一次ナルシズムと異なり退行的で、リビドーの一種の運動障害とされる。外界あるいは他者に向けられたリビドーが、対象から引き戻され自我へ取り込まれることで、自我はリビドーを再利得することが可能になる。ところが、本来対象に向けられるリビドーがナルシス的リビドーへと変化し自我に固定すると、リビドーは対象へと再帰できない。このリビドーの運動障害が第二次ナルシズムの病原となる。ナルシズムのもとでは、自我は対象の代替として自己（の身体）を性的対象として捉える。Vgl. Sigmund Freud, >>Zur Einführung des Narzissmus<<, in: *Gesammelte Werke*, Bd.10: *Werke aus den Jahren 1913-1917*, Frankfurt a. M. 1946/1967, S.137-170, hier 138ff; Sigmund Freud, >>XXVI. Vorlesung: Die Libidotheorie und der Narzissmus<<, in: *Gesammelte Werke*, Bd.11: *Vorlesung zur Einführung in die Psychoanalyse. 1916-1917*, Frankfurt a. M. 1944/1966, S.427-446, hier S.436; Sigmund Freud, >>„Psychoanalyse“ und „Libidotheorie“<<, in: *Gesammelte Werke*, Bd. 13: *1920-1924*, Frankfurt a. M. 1940/1967, S.231; Hartmut O. Häcker / Kurt-H. Stapf (Hrsg.), *Dorsch Psychologisches Wörterbuch*, 14. vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage, Bern 2004. S.631f.

⁵⁰ この点についてはイナ・パウル＝ホルン氏にご指摘いただいた。氏は論文 Ina Paul-Horn, >>Das Meer als Medium der Verwandlung<<, in: John Pattillo-Hess / Mario R. Simole (Hrsg.), *Die sexuellen Verwandlungsverbote*, Wien 2001, S.26-40.においてエリ阿斯・カネッティの「変身(Verwandlung)」という概念を用いて水という媒体に注目しつつ、「ナルシスとエコー」（オウィディウス）および「人魚姫」（アンデルセン）の分析を行っている。

⁵¹ Vgl. P. Ovidius Naso, *Metamorphosen in fünfzehn Büchern*, Stuttgart 1994, S.147-159, hier S.149, 155.

⁵² Ebd., S.149.

ない。秀でた声を持つ、こだま」⁵³のニンフである。彼女は「耳にした会話の最後の部分を反復することができる」⁵⁴。エコーはナルシスの言葉を繰り返してナルシスに返答する。彼女はナルシスの「一緒になろう」という言葉を反復し、その言葉を信じて彼の前に姿を現すが、拒絶されてしまう。恥ずかしさのあまりエコーは森に身を隠す。煩悶する彼女の体はしなびて骨となり、やがて声だけが残る。

狩に疲れたナルシスは、透みわたった泉にたどりつく。喉の渇きを癒していると、水面に映った美しい少年が目にとまり、恋をする。「お前が追い求めるものは何ものでもない。お前が視線をそらすなら、たちまち愛するものを見失うだろう。お前が目にするのは影、鏡像にすぎない。それは自らの存在を持たない」⁵⁵。ナルシスは、寝食を忘れて少年を見つめ愛し続けるが、やがてその少年が自分であることに気づく。「ひとつの心と魂を持つ僕ら。さあ、二人一緒に死のう」⁵⁶。愛に憔悴しきったナルシスは、水鏡に映る自分を見続けて息を引き取る。ナルシスを恨んでいたエコーも、このときばかりは心を痛み、彼の最期の言葉を繰り返して、彼に応答する。「さようなら！」

黄泉の国に迎えられた後も、ナルシスは冥界の河ステュクスに顔を映して眺め続ける。

この物語は、大きく二つに分けることができるだろう。前半部分では、聴覚を媒体としたナルシスと他者エコーとの関係が描かれている⁵⁷。ナルシス自身は、エコーを全く認識していない。一方、ナルシスに恋焦がれるエコーだが、彼女は自分から「決して会話を始めることができない」。彼女は他者が発話しない限り、声を発することができないだけでなく、声を発したとしても、それは他者の声の反復でしかないのだ。したがって、ナルシスが言葉を発し、こだま（エコー）が彼の言葉を反復して返しても、それは、ナルシスがエコーという他者を認識する契機には決してならず、エコーを聴覚的媒体としてナルシスが自身の声を聞くという再認行為なのである。

後半部分では、視覚を媒体としたナルシスの彼自身とのかかわりが描かれている。ここで視覚的媒体の役割を果たすのは、泉の水面である。ナルシスは、水面に映った少年を愛し、やがてその少年が自分自身であることを認識する。つまり、「ナルシスは、愛する主体であると同時に愛される対象でもある」⁵⁸、という認識に至るのだ。

エコーと水面はナルシスと鏡像関係にある。鏡像が主体から発せられる同一性を反復して主

⁵³ Ebd., S.149.

⁵⁴ Ebd., S.149.

⁵⁵ Ebd., S.155.

⁵⁶ Ebd., S.157.

⁵⁷ Vgl. Paul-Horn, S.33.

⁵⁸ Ebd., S.34.

体に戻すと同時に、主体自身を主体の対象にすることを可能にする。言い換えるならば、ナルシスが愛する主体であると同時に愛される対象であることは、ナルシスと鏡像関係にある他者の介在なしには不可能なのだ。ところが、この同一性の反復、あるいはナルシス的な自己同一の認識は、鏡像関係にある他者を認識しないことによってはじめて可能に、すなわち他者という差異性の抹殺によって保証されるのである。語り手がいみじくも言っている。「お前が追い求めるものは何ものでもない。お前が視線をそらすなら、たちまち愛するものを見失うだろう。お前が目にするのは影、鏡像にすぎない。それは自らの存在を持たない」と。

ナルシスとの鏡像関係にあつてナルシス的な自己同一性の認識を可能にするエコーは、ナルシスによって他者（対象）として認識されず、水面もまた「自らの存在を持たない」。エコーと水面は、それ自身として認識されることを留保された非存在であり、ナルシスとの差異性を抹殺された透明な媒体として、ナルシスの反復的な自己同一性を保証する構造に組み込まれるのである。

ナルシスの死は、すでにティレジ阿斯によって予言されていた。だが、ナルシスに拒絶されたエコーの死もまた、ナルシスの死を予示している。他者エコーという差異性の抹殺に支えられた、ナルシスの自己同一性を反復し再生産する構造は、死を必然的に、象徴的に内包しているのだ。ナルシスの自己同一性を保証するはずの鏡像エコーの死は、媒体の消失でもあり、それは同時に愛する自己とともに死んでいくことを選択するナルシスの死と共鳴しているのである。

2-2-4. ナルシス的自己同一性

さて、『性と性愛』における男性と女性の関係は、ナルシスとエコーの関係に類似している。『ナルシスとエコー』のテキストでより明白になるのは、ヴァイニンガーとナルシスが、同一化し得ないものを同一化するという誤りを犯している、という事実である。では、この誤りによって何が生じるのか。

以上の分析から明らかなように、ヴァイニンガーの描く男性が「絶対的な価値のある存在という理想を別の人間に投影する」ことや、ナルシスがエコーや水面に最愛の人物を反映させることは、他者を暴力的に自己同一化のプロセスに取り込む行為であった。なぜならば、ナルシス的な自己同一性は、投影関係あるいは鏡像関係にある他者の差異性の抹殺によってはじめて可能になるからである。したがって、他者の差異性を抹殺し、他者を非存在へと位置づけることで成立する男性的ナルシズムは、必然的に死を内包せざるをえない。

『性と性格』における女性は、男性のナルシス的な自己同一性を保証し維持し続けるための男性の他者であった。女性が非存在として、主体としての存立をあるいは他者の他者としての認

識を留保されつづける限りにおいて、男性の自己同一性は保持される。『性と性格』の男性は、自律する存在として規定されているにもかかわらず、女性という他者の介在なしには自己同一性を維持していくことができない、というパラドックスを抱えていることがナルシズムの分析によって明らかになる。

『性と性格』の最終章にあたる第二部十四章「女性と人類(Das Weib und Menschheit)」では、以上で論じてきた男性的ナルシズムが究極的に目指されている。そこでは、「性の問題」の解明と「性差の体系化」の最終的帰結として描かれる、男性ナルシズムのユートピアが提示される。したがって次章では「女性と人類」を中心に分析することで、男性ナルシズムのユートピアがどのようなものなのかを描こうと思う。そしてこのユートピアが内在せざるをえない重大な諸問題——それは必然的なアポリアでもある——をみていくことにしたい。

3. 男性性のユートピア

3-1. ユートピアへの条件

『性と性格』の課題であった「男性と女性の関係に対する新たな解釈」と「性差の体系化」の最終的帰結として描かれる男性ナルシズムのユートピア。ここに到達するためにはどうすればいいのか。

男性は、非性的な高次の生、すなわち精神的な形而上学的生と、肉体的、性的な低次の生という対極的な二つの生に引き裂かれている⁵⁹。男性が「高次の生のかわりに地上的な生を志向するということは、存在のかわりに非存在を選ぶことであり、無への意志であり、否定であり、悪それ自体である」⁶⁰。なぜ、男性が女性性の特徴でもある低次の生を選択することに「悪それ自体」というネガティブな判断を下されてしまうのか。それは、低次の生を選択が、男性性自体の否定、つまり本来の男性性の価値を体現する高次の生を否定するからであり、同時に、自己のうちにある女性的性質である性欲を肯定することになるからである。さらには、「男性が性的になったときにのみ、女性は存在と意味を持つ」⁶¹からである。つまり男性による性欲の肯定は、結果として女性に客体としての存在と意味を与えてしまうのだ⁶²。それは男性による男性であることの否定と、女性を存在論的、認識論的に存続させてしまうことにほかならな

⁵⁹ ジジエク、226、245 頁参照。

⁶⁰ GC, D400=J331. „die Richtung vom höchsten Leben weg zum irdischen hin [ist], das Ergreifen des Nicht-Seienden statt des Seienden, der Wille zum Nichts, das Nicht, das An-Sich-Böse.“

⁶¹ GC, D400=J331. „Nur indem der Mann sexuell wird, erhält das Weib Existenz und Bedeutung.“

⁶² Vgl. GC, D400=J331.

い。

ヴァイニングが、意志、価値の追求、愛は「人間にしかない」性質であり、性欲、衝動、快楽は動物的性質であると断言するとき⁶³、女性は明らかに彼が設定する人間というカテゴリーから排除され、男性と人間とは同一なるものとみなされている。しかしながら、男性による性欲の肯定は、まさに男性／女性、人間／動物、高次の生／低次の生、愛／性愛といった対立項を無効にし、これらの境界を消し去ってしまうのだ。その結果、ヴァイニングが構築してきた男性／女性という二項対立自体も、性差の判断基準も、性差体系も崩壊してしまう。

性差体系を崩壊させることなく、男性が高次の生を志向し本来の男性性を実現するには、どうすればいいのか。この問いに答えることこそが、『性と性格』の目指すべき最終的結論なのである。この問いは、「女性と人類」では別の角度から次のように問われている。「二つの性、すなわち男性と女性が存在する限り女性問題は生じるのであり、それは人類の問題でもあるゆえに解決しないだろう」⁶⁴。この場合の「女性問題」とは、まさに女性^が人間^{ではない}こと、人間とみなされないことが問題なのであり、それは男性と女性が存在する限り解決しないという。では、これを解決するにはどうすればいいのか。

ヴァイニングが提示する解決策はいたって単純である。女性が人間になること、すなわち女性の男性化と、男性の性欲の克服である。「女性性がいかに不道德なものであろうとも、女性^は女性^{である}ことをやめて、男性^{にならなければならぬ}」⁶⁵。つまり女性には、本来の女性性の実現を否定すること、すなわち女性性の特徴である性欲の放棄と、男性のように非性的な高次の生を目指す人間になることが求められる。したがって「重要なのは、女性性の是認でも無視でもない。そうではなく女性性の否定であり克服である」⁶⁶。女性性の克服とは、女性自身による女性性の抹殺と、その代替として男性性を獲得することなのである。女性性を持つ女性の消滅は、代替としての男性性を持つ「人間」の誕生でもあるのだ。

一方男性には、女性を人間とみなすと同時に本来の男性性を実現するために、自己の性欲を克服するという課題が課せられる。

男性の性欲こそが、はじめて女性に女性としての存在を与える。(……)男性が自分自身の性欲を克服しない限り(……)女性は生き続けるだろう。(……)しかしそのことは、男性が全き存在だけを志向するとき、女性はもはや存在せず、死滅することを意

⁶³ Vgl. GC, D378=J312f; Birkhan, S.46f.

⁶⁴ GC, D457=J387. „Darum wird die Frauenfrage bestehen, so lang es zwei Geschlechter gibt, und nicht eher verstummen denn die Menschheitsfrage.“

⁶⁵ GC, D452=J383. „Und wenn alle Weiblichkeit Unsittlichkeit ist, so muss das Weib aufhören Weib zu sein, und Mann werden.“

⁶⁶ GC, D453=J384. „Aber nicht Bejahung und nicht Verleugnung, sondern Verneinung,

味してもいる。男女の闘争とは、永久不変の存在でも本質でもない。それはいずれ解決されうるものであり、また当然解決されるべきものである。(……) 男性は性から救済されなければならないし、そうすることではじめて女性を救済することができるのである。(……) 当然女性は女性として滅亡していく。だがそれは、灰塵のなかから純粋な人間が新たに立ち上がってくるためなのだ。(……) 性愛の否定は人間の肉体的側面だけを殺す。そうすることによってのみ、人間の精神的側面によろやく完全なる存在を与えることができるからである。⁶⁷

男性が性欲を克服すれば、男性の性的客体としての女性の存在は消滅する。そして、それは同時に男性が「全き存在」を志向し達成することでもある。男性は自己の性欲、つまり肉体的な低次の生を完全に否定し、精神的、非性的な高次の生のみを生きること、本来あるべき男性性を実現するのだ。男性が性愛から脱却した存在という完全なる「人間」になる瞬間である。

こうして、男性が高次の生を生き本来の男性性を実現することと、女性が人間になることは、男女の性欲の放棄によってともに解決する。さらに性欲の放棄は、結果的に女性という存在自体を抹消へと導く。性欲の克服、女性の消滅、そして精神の肉体に対する絶対的優位性によって出現するユートピア、『性と性格』の最終的帰結、男性的な同一なるものの世界の出現である。

3-2. 単一性のユートピア

『性と性格』が目指したのは、男性的自己同一性を基盤とし、男性性を十全に体現する「天才」あるいは理想的男性 M で構成される世界である⁶⁸。この世界が成立するとき、男性性によってのみ成り立つ理想的男性 M、すなわち完全なる「人間」が新たに誕生するわけである。

Überwindung der Weiblichkeit, ist das worauf es ankommt.“

⁶⁷ GC, D456ff=J386ff. „Erst die Sexualität des Mannes gibt dem Weibe Existenz als Weib. [...] auch das Weib so lange leben, [...] bis er [der Mann] die eigene Sexualität wirklich überwunden hat. [...] Es ist aber gezeigt, dass die Frau nicht ist, und in dem Augenblicke stirbt, da der Mann gänzlich nur sein will. Das, wogegen der Kampf geführt wird, ist keine Sache von ewig unveränderlicher Existenz und Essenz: es ist etwas, das aufgehoben werden kann, und aufgehoben werden soll. [...] der Mann muss vom Geschlechte sich erlösen, und so, nur so erlöst er die Frau. [...] Freilich geht sie, als Weib, so unter: aber nur, um aus der Asche neu, verjüngt, als der reine Mensch, sich emporzuheben. [...] Die Verneinung der Sexualität tötet bloß den körperlichen Menschen und ihn nur, um dem geistigen erst das volle Dasein zu geben.“

⁶⁸ Vgl. Anderson, S.435, 445, 451.この論文は『性と性格』における男性性について扱った数少ない論文の一つである。ただし、アンダーソンは男性性のユートピアがどのように構築されたような問題を持つのか、ということについては論じていない。

新たな「人間」は、精神的永遠的生を生きるのだろう。だが、現実にはありえないはずの理想的男性 M、完全なる「人間」は存在しえるのか。

男性性のユートピアにおいてようやく達成できるものは、男性的な同一なるものとしての、完全なる「人間」である。しかしながら、この世界が出現するために講じられてきた男女の性欲の放棄という解決法は、終極的なアポリアも抱えている。

この解決法では、女性においては自身による女性性の克服が行われ、その結果女性性を持つ女性が消滅する。換言するならば、女性が女性性の克服によって人間になることとは、男性という単一性に女性を同化、脱女性化させて取り込むという行為なのだ。ここにおいても他者の差異性の抹消と同一化への取り込みという、ナルシズムが機能する。ナルシズムの暴力性ゆえに他者の死が必然とされ、さらには他者の死はナルシズム的な自己自身の死をも予示することはすでに述べた。このことは、男性による性欲の克服が導く結果と見事に一致する。男性においては性欲の克服によって、男性の性的客体としての女性の存在が消滅する。その結果、生殖機能の放棄による肉体的、有機体的な人間の存続が停止し、人間自体が死滅する。女性性を根絶することは、女性そのものの文字通りの死滅のみならず、男性を含む人間自体の死滅の誘因となるのだ。

「性欲の否定は人間の肉体的側面だけを殺す。そうすることによってのみ、人間の精神的側面によりややく完全なる存在を与えることができる」。これが、精神的永遠的生を実現することは有機体的永遠的死を実現することでもあるという、男性性のユートピアのアポリアなのである。

また、この解決法においても、結局のところヴァイニンガーが構築してきた男性／女性という二項対立自体も、性差の判断基準も、性差体系も崩壊する。男性と女性が存在する限り不可能とされた、男性による本来の男性性の実現と女性が人間になることは、男性と女性という二つの性がもはや存在しないことによって、すなわち二つの性の代わりに完全なる男性 - 「人間」という単一性が成立することによって実現するからである。ただし、イングフィルト・ビルクハンが指摘するように、「もし女性がいなければ、男性は自らを男性と名のることも自覚することもできないだろう」⁶⁹。このように、ヴァイニンガーによる性差体系構築の帰結は、男性の単一化を目指した差異性の抹消であり、この帰結自体が性差体系を崩壊させるのである。性愛の肯定が本来の男性性の実現、ひいては「人間」という単一性の成立を不可能にし、性愛の否定がそれらを可能にするという決定的な違いがあるにせよ、男性と女性がともに性愛を肯定あるいは否定することは、いずれにしても男性／女性という対立項および境界を無効なものにする。

⁶⁹ Birkhan, S.47.

男性 - 「人間」という単一性が成立するとき、二項対立的な性差体系は解消し、精神的永遠的生が実現すると同時に有機体的永遠的死も実現する。完全なる存在、ひとつであること、他者の介在なき自己同一性の成立は、まさに『ナルシスとエコー』の物語と同一の終局を迎える。ナルシスと『性と性格』の帰結である完全なる自己が、「愛する主体であると同時に愛される対象でもある」という同一なるものの存在を他者の介在なく完全に実現するとき、彼らはすでに永遠なる死の世界にいるからである。

4. 結論——男性的ナルシズムと文化的現象

『性と性格』の最終的帰結は、性差体系の崩壊とともに出現した男性的な同一なるものの永遠的なユートピアであった。最後に、この男性性のユートピアを十九世紀から二十世紀への転換期ウィーンにおける文化状況に位置づけ、本論の結論にしようと思う。

当時のウィーンでは、文化状況が女性性および性愛という問題と結びつき、文化の「女性化 (Verweiblichung)」⁷⁰という現象として捉えられている。それは一方で開放的な性愛や女性賛美という形でポジティブに表出し、芸術と生活を一体化させる若きウィーン、分離派、ホーフマン・スタールらによって支持された。他方で文化の女性化は、社会変動による従来の秩序とモラルの崩壊、解放された女性たちに対する嫌悪、デカダンスという形でネガティブに捉えられ、芸術と生活の分離を唱えるカール・クラウスやアドルフ・ロースをはじめとする反動保守の知識人や芸術家たちから文化的危機とみなされた⁷¹。

反動保守の人々にとって、文化の女性化はあらゆるものの決定不可能性、相対化というカオスを突き進むことに他ならず、彼らはこのカオスから文化を救出しようとする態度をとる⁷²。このとき、文化の女性化を象徴する女性性は、もはやフロイト的に去勢された受身的な存在としてみなされず、男性性に新たな書き換えを要求する侵略的存在であり、不安を喚起する脅威であった。したがって、以上の意味での近代に対する対抗処置として、反近代あるいは異なる近代のありようが求められることになる。そこで、文化の女性化に対する反動として、支配的、秩序的な価値を持つ理想化された男性性が願望され、これに対置される。

ヴァイニンガーの『性と性格』にみられる文化状況に対する反応と企ては、疑いなく反動保守的である。したがって、『性と性格』では異なる近代のありようの可能性のひとつが「女

⁷⁰ Vgl. Wagner, S.99; Le Rider, S.242f; Palmier, S.91f.なお「文化の女性化」という現象は、転換期のウィーンだけではなくヨーロッパ全般に及ぶ文化状況である。

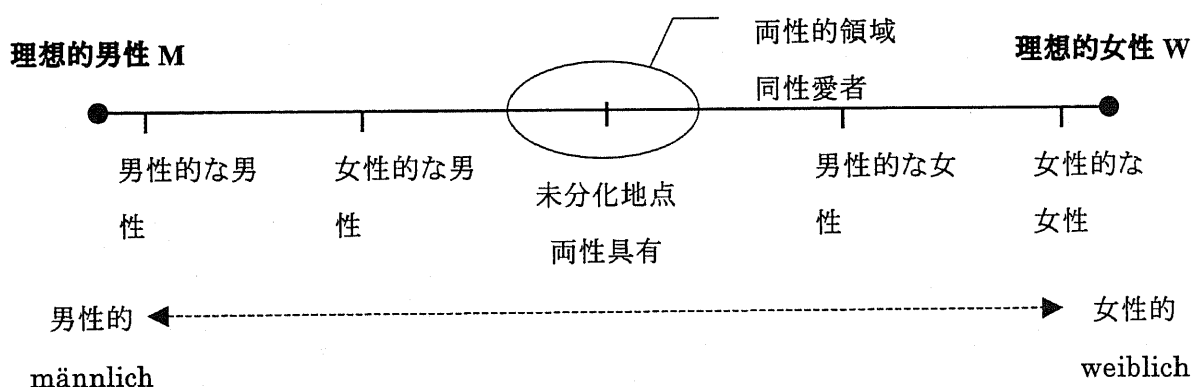
⁷¹ Vgl. Wagner, S.99; Le Rider, S.248-255; Palmier, S.91.

⁷² Vgl. Le Rider, S.254; Palmier, S.91. ブッチ・グルッスマン、23-24 頁参照。

性化する文化から脱する体系(Abweichungssystem)」⁷³として具体的に提示されているのだ。まさに、男性的な同一なるもので構成されるユートピアを最終的に目指す、「性差体系」として。そこで企図されたのは「概念によって世界を押さえ込む」⁷⁴こと、つまり世界を概念によって支配し、制御し、秩序だてようとするのであったが、この企図へのヴァイニングアの執着は「類別化、等級化という狂気」⁷⁵あるいは「男性性の狂気」⁷⁶という様相を帯びるまでに過激なものであった。

こうして『性と性格』は、「女たちについての論文から男たちの不安と願望を理解するためのドキュメントへ」⁷⁷と再読可能なテキストとなる。男性と女性という原初的の二元論から発展したヴァイニングアの二項対立の哲学は、以上でみてきた「途方もないセクシュアルの神話の支柱」⁷⁸であるだけではなく、男性自らの身体的死をも肯定するラディカルな男性的ナルシズムの、男性的同一性のメカニズムなのである。

図1：両性性(Bisexualität) <性の中間形態>



※ホモセクシュアルは男性的な状態から女性的な状態へと移行する性の中間形態において、その中間段階に位置づけられている。Vgl. GC, D20=J26, D55ff=J59ff.

⁷³ Palmier, S.94.

⁷⁴ GC, D3=J13. „Wir erwehren uns der Welt durch unsere Begriffe.“

⁷⁵ Palmier, S.82.

⁷⁶ Wagner, S.104.

⁷⁷ Ebd., S.98.

⁷⁸ Ebd., S.101.

図 2 - 1 : 性差体系<男女の定義>

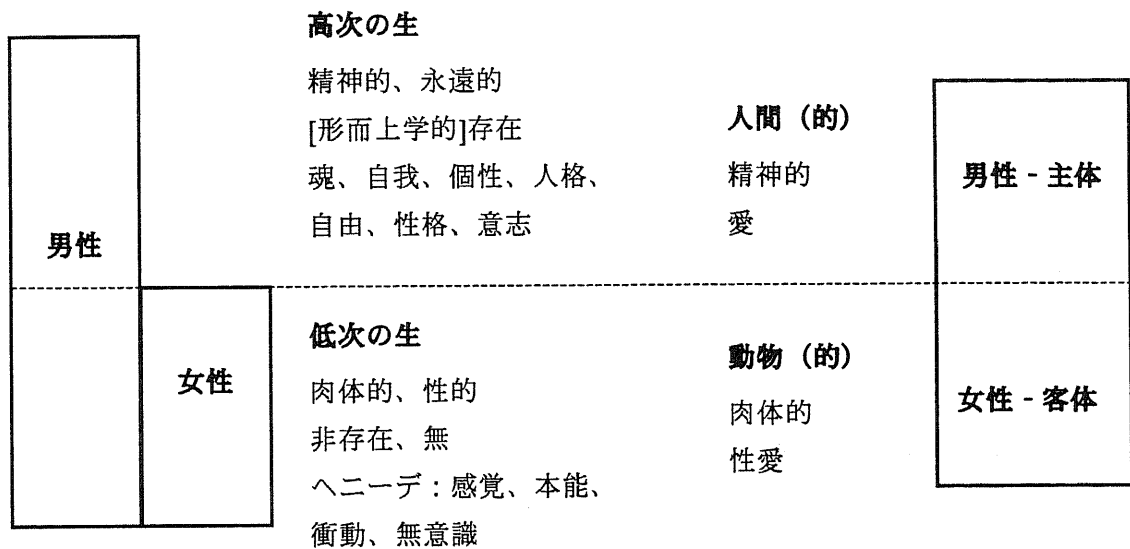
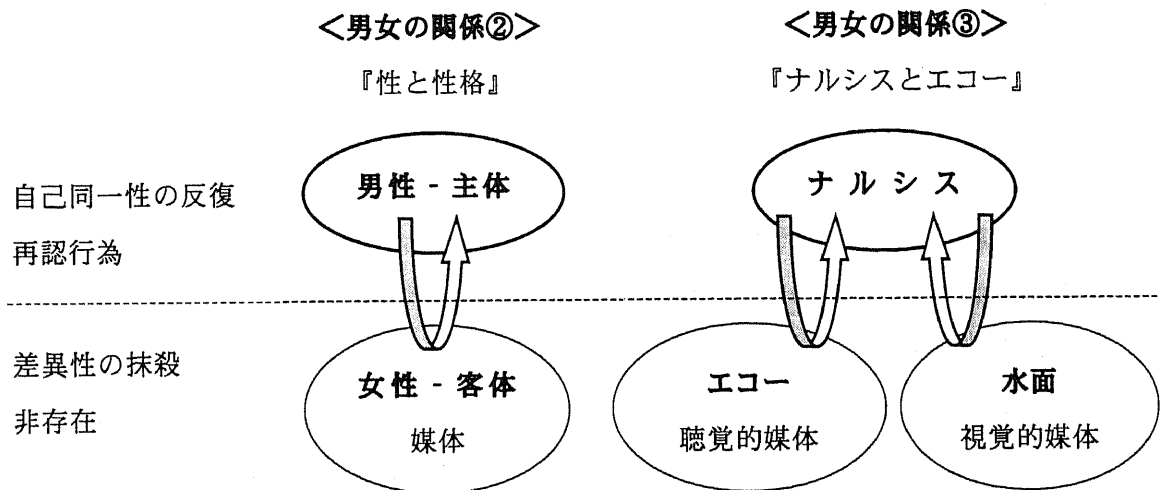


図 2 - 2 : 愛と性愛<男女の関係①>

図 3 : ナルシシズム的投射現象、鏡像関係



参考文献

1) 第一次文献

- Weininger, Otto: *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung.* Wien / Leipzig 1903.
- : *Geschlecht und Charakter.* Zweite, mehrfach verbesserte Auflage. Wien / Leipzig 1903.
- : *Geschlecht und Charakter.* Dritte, mit der zweiten gleichlautende Auflage. Wien / Leipzig 1903.
- : *Geschlecht und Charakter.* Einundzwanzigste, unveränderte Auflage. Wien / Leipzig 1920.
- : *Geschlecht und Charakter.* Volksausgabe. Wien / Leipzig 1926.
- : *Geschlecht und Charakter.* München 1980.
- ヴァイニンガー、オットー、竹内章訳『性と性格』、松村書館、1980年。
- Naso, P. Ovidius: *Metamorphosen in fünfzehn Büchern.* Stuttgart 1994. S.147-159.

2) 第二次文献

- Anderson, Susan C.: *Otto Weininger's Masculine Utopia.* In: Gerald R. Kleinfeld (Hrsg.): *German Studies Review.* Volume XIX, Number 3. Arizona 1996. S.433-453.
- Birkhan, Ingvild: *Das Wien der Jahrhundertwende – Eine Wende für oder gegen die Frau?* In: Herta Nagl-Docekal / Herlinde Pauer-Studer (Hrsg.): *Denken der Geschlechterdifferenz. Neue Fragen und Perspektiven der feministischen Philosophie.* Reihe Frauenforschung Bd. 14. Wien 1990. S.41-70.
- ブッチ=グルックスマン、クリスティーネ、山田直・田代葆訳「危機の文化と女性性の神話」『ファシズムと女性たち』（リタ・タルマン編）、三嶺書房、1990年、10-35頁。
- Eckelt, Daniel: *Der Narzissmus des metaphysischen Subjekts: Marginalien zu Otto Weiningers Subjekttheorie.* In: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.): *Otto Weininger. Werk und Wirkung.* Wien 1984. S.158-166.
- Felman, Shoshana: *Les Femmes et la Folie : Histoire Littéraire et Idéologie.* In: *La Folie et la chose littéraire.* Paris 1978. S.138-155. (シヨシャナ・フェルマン、土田

- 知則訳「女性と狂気——文学史とイデオロギー」『狂気と文学的事象』、水声社、1993年、219-249頁。)
- : *Women and Madness: The Critical Phallacy (Balzac, „Adieu“)*. In: *What does a woman want? Reading and Sexual Difference*. The Johns Hopkins University Press 1993. S.20-40. (シヨシャナ・フェルマン、下河辺美知子訳「女性と狂気 批評的/致命的誤謬(クリティカル/クリティカル・ファラシー) (バルザック「アデュー」)」『女が読むとき女が書くとき 自伝的新フェミニズム批評』、勁草書房、1998年、33-66頁。)
- Fliess, Wilhelm: *In eigener Sache*. Berlin 1906.
- Freud, Sigmund: *Zur Einführung des Narzissmus*. In: *Gesammelte Werke*, Bd.10: *Werke aus den Jahren 1913-1917*. Frankfurt a. M. 1946/1967. S.137-170.
- : *XXVI. Vorlesung: Die Libidotheorie und der Narzissmus*. In: *Gesammelte Werke*, Bd.11: *Vorlesung zur Einführung in die Psychoanalyse*. 1916-1917. Frankfurt a. M. 1944/1966. S.427-446.
- : *„Psychoanalyse“ und „Libidotheorie“* In: *Gesammelte Werke*, Bd. 13: 1920-1924. Frankfurt a. M. 1940/1967.
- : *Briefe 1873-1939*. Ernst L. Freud (Hrsg.): Frankfurt a. M. 1960.
- : *Studienausgabe Band VIII: Zwei Kinderneurosen*. Alexander Mitscherlich / Angela Richards / James Strachey (Hrsg.): Frankfurt a. M. 1969.
- Häcker, Hartmut O. / Stapf, Kurt-H.: *Dorsch Psychologisches Wörterbuch*. 14. vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage. Bern 2004.
- Hirsh, Waltraud: *„26. unveränderte Auflage“*. *Bemerkungen zur Textgeschichte von Otto Weiningers Geschlecht und Charakter*. In: Walter Methlagl (Hrsg.): *Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv*, Nr.13/1994. Innsbruck 1994. S.59-73.
- Heindl, Waltraud: *Geschlecht oder Charakter. Otto Weiningers Kultfiguren*. In: Klaus Amann / Hubert Lengauer (Hrsg.): *Österreich und der Große Krieg 1914-1918. Die andere Seite der Geschichte*. Wien 1989. S.81-87.
- Hyams, Barbara / Horowitz, Nancy A.: *A critical introduction to the history of Weininger reception*. In: Nancy A. Harowitz / Barbara Hyams (Hrsg.): *Jews & Gender: responses to Otto Weininger*, Philadelphia 1995, S.3-20.
- Kraus, Karl: *Die Fackel*. Nr. 144. 17. Oktober, Wien 1903.
- : *Die Fackel*. Nr. 229. 02. Juli, Wien 1907.
- : *Die Fackel*. Nr.351/352/353. 21. Juni, Wien 1912.

- Le Rider, Jacques: *Modernismus / Feminismus – Modernität / Virilität. Otto Weininger und die asketische Moderne*. In: Alfred Pfabigan (Hrsg.): *Ornament und Askese*. Im Zeitgeist des Wien der Jahrhundertwende. Wien 1985. S.242-260.
- Löffler, Dietrich: *Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“*. In: Karol Sauerland (Hrsg.): *Malancholie und Enthusiasmus: Studien zur Literatur- und Geistesgeschichte der Jahrhundertwende*. Frankfurt a. M. 1988. S.122-133.
- モッセ、ジョージ・L、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ』、柏書房、1996年。
- Palmier, Jean-Michel: *Otto Weininger, Wien und die Moderne*. In: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.): *Otto Weininger. Werk und Wirkung*. Wien 1984. S:80-95.
- Pankau, Johannes G.: *Körper und Geist. Das Geschlechterverhältnis in Elias Canettis Roman Die Blendung*. In: *Colloquia-Germanica: Internationale Zeitschrift für Germanistik*. 23:2. Tübingen 1990. S. S.146-170.
- Paul-Horn, Ina: *Das Meer als Medium der Verwandlung*. In: John Pattillo-Hess / Mario R. Simole (Hrsg.): *Die sexuellen Verwandlungsverbote*. Wien 2001. S.26-40.
- Rodlauer, Hannelore: *Fragmente aus Weiningers Bildungsgeschichte*. In: Hannelore Rodlauer (Hrsg.): *Otto Weininger. Eros und Psyche. Studien und Briefe 1899-1902*. Wien 1990, S.11-51.
- Stanzel, Franz Karl: *Der weibliche Mann: Eine rückläufige Spurensuche von James Joyce zu Otto Weininger*. In: Karlheinz Stierle (Hrsg.): *Poetika*, Bd. 29. München 1997. S.141-157.
- Stieg, Gerald: *Kafka and Weininger*. In: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (Hrsg.): *Jews & Gender*. Philadelphia 1995. S.195-206.
- Wagner, Nike: *Geschlecht und Charakter*. In: Paulus Manker (Hrsg.): *Weiningers Nacht*, 2. überarbeitete Auflage. Wien 1988. S.97-106.
- ジジエク、スラヴォイ、松浦俊輔・小野木明恵訳「オットー・ヴァイニンガーもしくは『女は存在しない』」『快樂の転移』、青土社、1996年、221-265頁。